

【ポスター発表】

自閉症者の余暇活動実践の発展について -親との協働を通して-

○川崎医療福祉大学 小田桐 早苗 (8491)

〔キーワード〕 自閉症、親、協働

1. 研究目的

本研究は、報告者が6年に渡り自閉症児とその親とともに活動してきた余暇サークルの発展について概観し、その発展の契機となったものを分析するものである。自閉症児・者の思春期、青年期の余暇については、その研究は少なく、発展の難しさが指摘されている。本研究では、中学校時期より小集団での活動を開始し、現在、学齢期を終了した彼らの、これまでの余暇グループとしての活動のプロセスを示し、その発展と継続性の要素を示すことで、今後の自閉症児者への余暇支援の在り方について検討を行うものである。

2. 研究の視点および方法

本研究においては、自閉症児者のグループ活動を対象に、継時的な活動の発展について検討を行うものである。以下の2点を材料とし、分析を行う。①これまでの活動を振り返り、活動内容とグループの発展について分析を行うこと、②親を対象にインタビュー調査を実施し、継続性と発展性について検討を行うことの2点である。

3. 倫理的配慮

グループ活動の参加者について、親を対象に本研究について口頭および文書にて説明を行っている。説明内容は、①匿名性の確保、②不利益、利益がないこと、③協力は任意であること等である。同意を得られた親を対象にインタビューを実施した。

4. 研究結果

グループ活動は、経過を追うごとに、個々の興味関心やそれぞれへの必要な配慮が十分になされるようになってきていた。また3年を経過する頃より、学齢期終了後の関係についても話題になり、活動が地域資源を利用したものへと発展してきていた。

親自身は、子どもの特性について専門家の存在によって継続できたこと、それぞれの子どもの情報を共有することでグループとして活動を維持することへの意識が向いていた。

5. 考察

継続と発展性の要素には、「専門家の存在」、「親同士が互いの子を知るプロセスが確保されていること」「将来への展望」が影響していることが示唆された。とくに、自閉症という特性について、専門家とともに学びあう時間があることで、親や本人の希望をどのように活動に取り入れるのか現実的に考えることができ、各家庭の中で希望としていたものが実現しうるものとして体験されていたことが重要な点であると考えられた。

